

昔40と一緒にいったパンケーキ屋に9を連れて行く45

畑渚

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

リクエストをもらったのでTwitterでつぶやいた概念を形に

リクエスト内容

・45か9

・ハッピーエンド

目次

昔40と一緒にいったパンケーキ屋に9を連れて行く45 | 1

昔40と一緒に行ったパンケーキ屋に9を連れて行く45

「45姉が人間の店につれてってくれるなんて珍しいね」

半歩後ろを歩く9がそう呟く。そうかもしれない。あの日からというもの、私は人間の店にはあまり立ち入らないようにしていた。

でも、あの店だけは別だった。短い私の人生の中で、唯一輝いている思い出の場所。

「いらっしやいませ」

森の匂いを感じる扉を押せば、初老の男性と女性が落ち着いた声で迎えるあいさつを告げる。あの時と変わらぬまま、その店は維持され続けていた。

「わく！すごい雰囲気の良いお店！」

「9、はしゃがないの」

9は目をキラキラと輝かせながら、店内を見回す。壁にかかる味のある絵。カウンター上に飾られた著名人のサイン。そして店内を満たす木の匂い。あの時のなんら変わりのない店内だ。

「もしかして……これって天然木？」

9はカウンター席に座ると、机をコツコツと叩いた。適度な空洞が返す音は、プラスチックや金属とはまったく違っていた。

「ああ、この地域の東にはまだ天然木が自生している地域があるんだよ」

店の主人は立派な髭を撫でながらそう言った。9も興味津々に話に聞き入っている。

「9、先に注文をきめましょう？」

「あつそのほうがいいね。45姉はどうする？」

「私はこの日替わりセット」

前に来たときは、いちごののった甘いパンケーキだった。ともにでてきたコーヒーマも素晴らしかった。思い出の中でも色褪せない味が、再び私の足をここに向けさせたと言っても過言ではない。

「じゃあ私はこのチーズのパンケーキと、それから45姉のと同じコーヒードー！」

店の主人は笑顔でうなずくと、フライパンにバターをのせた。

「それで、45姉はこの店をなんで知ってるの？」

「……私の過去は見たのよね」

「うん……」

うつむく9を見てため息が出そうになる。どうやら9は私の過去について、見たことで自責の念を感じているようだった。

「別に気にする必要はないわ」

開いた窓から外を眺めてみる。今日も大通りは人が多く、すこし騒がしくも感じる。しかし店内は、外から流れ込んでくる涼しい風で心地よい空間になっていた。

「40が……連れてきてくれた店なの」

「なるほど……」

なんとなく会話のしづらい空気を変えたのは、料理が置かれてからだった。

「すごい美味しそう！」

9ははしゃぎながら携帯端末で写真を撮っている。

「ほら、45姉も！」

9が笑って、カメラのレンズをこちらに向ける。

『ほらー！45、笑って笑って！』

その笑顔が、まるで40のようで……

「……45姉？」

「えっああ、ごめん。少し考え事を」

「もー、せっかくのパンケーキが冷めちゃうよ」

9は既にナイフとフォークを持っている。まるで待てと命令された忠犬のようだった。

「じゃあ、食べましょうか」

私がフォークに手を触れた、その時だった。

「へえ、こころ？」

「うん、あたいたいイチオシのパンケーキ屋！」

何気ない会話だった。ここもある程度知名度のある店だ。他の客がいてもおかしくない。

しかし、その外から聞こえた声の片方は、聞き覚えがあった。忘れるはずもない、しかし、けっして聞けるはずのない声だった。

「K2もきつと気に入ってくれと思うよ！」

「からいのはあるかな!？」

「からいのは……、どうだったかなあ……」

へへへと苦笑いしながら、その声の主は店の扉を押しした。

「45姉……アレって」

「何を言ってるの9。私の知る40はもういない。きつとアレは新造されたのよ」

「えっでも……、いやなんでもないよ」

9は逃げるように、パンケーキを食べる手を早めた。私は今、どんな酷い表情を浮かべているのだろうか。

私もパンケーキを食べる手を早める。一刻も早く、後ろのテーブル席で楽しそうに談笑する彼女の声から遠ざかりたかった。

パンケーキを流し込むように、コーヒーを飲み切る。カップをソーサーに置くと、カチャンと小さな音がした。

しかしその小さな音は、なぜか静まり返っていた店内では大きく響いた。

「……45?..あんたもしかして45?..」

背中側から聞こえる声も、もちろん静かな店内では鮮明に聞こえた。

404の私をUMP45であると認識してくれる戦術人形UMP40は、この世界に一人しかいない。